



メディア・リテラシーは なぜ必要か？

もり
たつや
森達也

目標

- 情報の信頼性の確かめ方について考える。
- メディア・リテラシーについての理解を踏まえ、複数の社説を批判的に読み、新聞社としての意見や主張について考える。

あなたはテレビを見ている。アフリカのサバンナのド

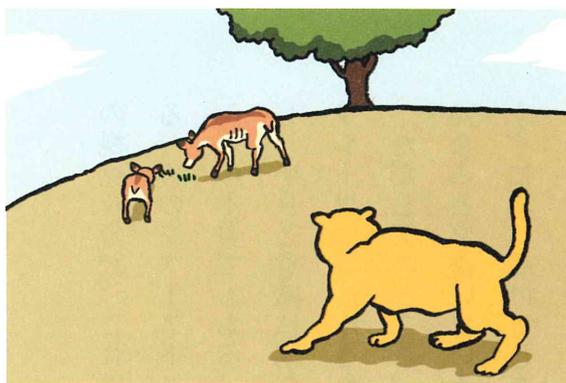
キュメンタリーだ。主人公は一匹の雌ライオン。最近三匹の子どもを産んだばかりだ。この年のアフリカは、干ばつが長く続いていた。ライオンの餌であるインパラやヌーなどの草食動物が飢えて死んでいる。このライオンの親子もすっかり衰弱している。

このままではみんな死んでしまう。その日も雌ライオンは、ほとんど動けない子どもたちをいとおしそうに見つめてから狩りに出る。草原の遠くのほうで二匹のインパラを見つけた。大きなインパラを追いかけられるほどの体力は残っていないが、小さなほうならなんとかしとめる

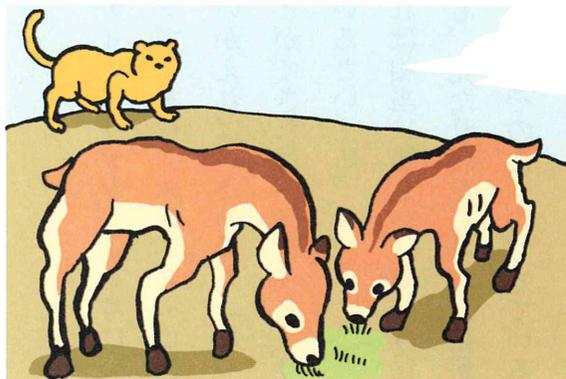
ことができるかもしれない。

雌ライオンは風下からゆっくりとインパラに近づいていく。この時テレビを見ながらあなたは、狩りが成功しますように、と祈るはずだ。インパラがライオンの気配に気づきませんように。子ライオンたちが救われますように。

ここで視点を変えよう。あなたはやはりアフリカのドキュメンタリーを見ている。ただし今回の主人公は子どもを産んだばかりの雌のインパラだ。干ばつで母と子は飢えている。ようやくわずかな草地を見つけた。母と子は夢中で草を食べる。その時、遠くからそっと近づいて



雌ライオンの側から撮影した風景



インパラの親子の側から撮影した風景

くる痩せ細った一匹のライオンの姿をカメラは捉えた。その雌ライオンは、じつと子どもインパラを見つめている。この時あなたは何を思うだろう。早く気づけ、と思うはずだ。食べられてしまう。早く逃げろ。

もう気づいていると思うが、この二つの作品は全く同じ状況を撮影している。違いは何か。カメラの位置だ。つまり視点。どこにカメラを置くかで、映し出された世界はこんなに違う。そしてその映像を見たあなたは、全く違う感情を抱く。これが情報の本質だ。

世界はとても多面的だ。多重的で多層的。どこから見るかで景色は全く変わる。ここでは動物のドキュメンタリーを例にあげたが、あなたがスマホでチェックするニュース、あるいはSNSで誰かが書いた情報も、全て構造は同じなんだと知ってほしい。フリードリヒ・ニーチェは、以下の言葉を残している。

「事実はない。あるのは解釈だけだ。」

十九世紀のドイツに生まれたニーチェは、テレビもスマホもSNSも知らない。でもこの言葉は、情報と、その情報を伝える手段であるメディアの本質を、とても端的に表している。解釈とは、その事実に接した人の視点。あるいは思い。それが情報として伝えられる。でも多くの人は情報を見たり読んだりした段階で、それを事実そのものだと思いこんでしまう。

百パーセント正確な事実は伝えられない。メディアがまちがえることもある。情報とは常に、それを伝える人

*フリードリヒ・ニーチェ P.63下⁵

一八四四—一九〇〇 ドイツの哲学者。

の視点なのだ。これはメディア・リテラシーを身につけるためのファーストステップであり、メディア・リテラシーの本質でもある。言いかえれば、このメカニズムをしつかりと意識に刻むことができれば、メディア・リテラシーはほぼ達成されているといえる。

ただし実のところ、これは相当に難しい。偉そうにこんなことを書いている僕も、見たり読んだりした情報を、すぐに真に受けてしまう。人はそのようにできている。その自覚をもつことも重要だ。

僕たちは今、テレビやラジオ、新聞、インターネットなどさまざまなメディアをとおして情報を受け取っている。二十世紀初頭、映像メディア（映画）と通信メディア（ラジオ）が誕生した。それまでは新聞や書籍など文字メディアだけだった。文字メディアを理解するためには、教育を受けることが前提だ。つまり識字能力。ところが二十世紀以前の世界は、教育を万人の権利とみなしていない。多くの人は文字を読んだり書いたりすることができなかった。だから教育を受けていなくても理解す

ることができる映画とラジオは、世界中の人たちに熱狂的に迎えられた。こうしてマスメディアが誕生する。それによって、自分たちの生活はより豊かになり、格差や戦争もいつかはなくなる。そう考えた人は多かった。ところが現実は逆に動いた。

映画とラジオに人々が熱狂した一九二〇年代から三〇年代、ファシズム（全体主義）という政治形態が雨後の筍たけのこのように世界に現れた。ナチス・ドイツ、そのドイツと同盟を結んだイタリアと日本、他にはスペインなどもファシズムに傾いた国だった。ファシズムを実現するためには、メディアを使ったプロパガンダが不可欠だ。誰もが理解できるメディアが誕生したことで、それが可能になってしまった。

もしもこの時多くの人が、ライオンから見た視点とインパラから見た視点では世界は全く違うことを理解していれば、ファシズムは誕生しなかっただろう。でもこの時代、メディア・リテラシーを身につけた人などほばいない。A国は野蛮な国で危険極まりないと情報を与えら

れば、ならば攻撃される前に攻撃しなくては、と思ひこむ。わが国の指導者は人格者でその指示に従えば国は栄えるのだと言われれば、なんの疑いもなく信じこむ。こうして戦争が続く。

第二次世界大戦では、ファシズム国家であるドイツとイタリアと日本は敗れた。その後の裁判で、多くの戦争犯罪が裁かれた。本来なら映画とラジオは、戦争に対して大きな責任があると裁かれねばならなかった。でも映画とラジオは被告席に座れない。だから責任を追及されなかった。それどころか戦後、映画とラジオは融合して、テレビジョンが誕生する。

技術は進化した。僕たちは今、地球の裏側で起きていることをテレビでライブとして見ることができる。さらに、国境や地域を簡単に飛び越えてしまうインターネットが、メディアにおける新たな要素になった。情報を受信するだけではなく、発信できるようになったことは画期的だ。こうしてメディアは新たな時代を迎える。まさしく今は情報の時代だ。

15

10

5

だからこそ知ってほしい。メディアは便利だけにとっても危険でもある。多くの人が情報によって苦しみ、命を奪われてきた。でも、これは過去形ではない。今も続いている。正しい使い方を知らねばならない。誰のためか。あなたのため。みんなのため。メディア・リテラシーを身につけよう。そしてもしこれに失敗すれば、たぶん人類はメディアによって滅びるはずだ。

*メディア・リテラシー P 64 上

新聞やテレビ、ラジオ、インターネットといったメディアの情報を主体的・批判的に読み解く能力。

*ファシズム P 64 下

一つの政党の独裁による国家主義的な政治体制。

*プロパガンダ P 64 下

ここでは特に政治的な主義・主張の宣伝のこと。



森 達也「一九五六―」

広島県に生まれた。映画監督。

著書に『たったひとつの「真実」なんてない』『ニュースの深き欲望』などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。

